世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『インドから来た紳士』

第 30 話

提供 ハウス食品工業

制作 日本アニメーション
フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター

セーラ・クルー
ミンチン先生
アメリア先生
ベッキー
ピーター
モーリー
ジェームス
×××
ベッキーの母親

テディ（弟）

マアサ（妹）

カーマイケル弁護士

（ラム・ダス）

（クリスフォード氏）

隣家の管理人

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メル一家（ネズミ）

1 ミンチン女子学院・屋根の上（朝）

屋根屋根に、朝日がさしている――

聞える教会の鐘の音と――

2 同・屋根裏部屋（朝）

――さえずる雀たちの啼き声。

× × ×

ベッドに、眠っていたセーラ、はっと眼をさまし、身を起す。

枕辺のエミリーに気づき、微笑で取り上げる――

セーラ「お早う、エミリー……」

続いて隣りの壁に、

セーラ「お早う、ベッ…」

ノックしようとして、はっと手を停める。

セーラ「そうだわ…ベッキーは…」

3 同・ベッキーの部屋

セーラの声「…夏休みでお里帰りをしていて、留守だったのだわ」

ガランとした部屋——ベッドに置き忘れられた欠けた石板に、下手クソなベッキーの練習文字が書かれている

(石板は前出のセーラのもの)。

4 同・屋根裏部屋

着換え終ったセーラ、エミリーを抱いて吐息する——

セーラ「エミリー…この屋根裏には、もう私だけなのよ…」

ふと、雀たちの声に、天窓を見上げ、紙包みをとると、

テーブルに上る――

5 同・裏屋根の上

窓が開き、エミリーを抱いて顔を出すセーラ――
セーラ「お早う、雀さんたち…」
セーラ、紙包みのパンくずを雀たちに撒いてやる――
――争って、ついばむ雀たちの群。
微笑で見守るセーラ、ふっと一方へ眼を移す――
× × ×
隣接した隣家の大屋根に――閉じられたままの屋根裏部屋の窓が見える。
× × ×
セーラ「エミリー…せめて、空家のお隣りに、誰か引越して来てくれると、嬉しいわね」

× × ×

その隣家の正面玄関ドアーに── TO LET の看板。

セーラ、隣家の屋根裏部屋の窓をみつめて、夢想する──

セーラ「そうよ…いつかきっと、お隣りに大家族の一家が引越して来るわ…そして屋根裏部屋に上って来た子供たちが、一斉にあの窓をあけて…」

× × ×

突如、その窓が開き、次々に顔を出した子供たちが、鈴なりのように窓一杯になって、口々にセーラに向って笑顔で手を振り、呼びかける。

女子の声「おはよう、お隣りさん！」

男子の声「ねえ君、ひとりぼっち？」

女子の声「お友達になりましょうよ！」

その声、声、声がエコーして重なり合う。

× × ×

セーラ「ありがとう、みなさん、こちらこそよろしくね！」

突然オフから声がかぶる。

×　×　×

声　「セーラ！」

一瞬、鈴なりの子供たちの顔、顔、顔が消え失せ　ひっそりと閉じたままの窓に戻る。

モリーの声「セーラ…聞こえないのかい！」

はっと我にかえるセーラ――

6 同・屋根裏部屋

昇った天窓の椅子から、驚いて振返り、見おろすセーラ――

×　×　×

その下に、両手を腰にしたモリーが、眼をつり上げて見

上げている。

モリー「フン、なにをしてるかと思や、朝っぱらから、景色なんか眺めてて！…さあ、さっさと朝の支度にかかるんだよ！」

セーラ「は、はい、モリーさん…」

7 同・台所

かまどに火をつけ、鍋や湯沸しをかけるセーラ——
そこへ、ジェームスが大あくびで起きて来る——

ジェームス「フワフワフワフワ…いやあ、よく寝た、よく寝た… 生徒たちがいないと楽で有難いねぇ」

セーラ「お早うございます、ズェームスさん」

ジェームス「おう、昨夜云いつけといた通りに、やっといただろうな？」

セーラ「はい、ジェームスさん」

ジェームス「ようし……」

モリーがセカセカと入って来る。

モリー「セーラ！…院長先生が、朝食はお部屋に運ぶように仰言ゃってたからね。そのつもりでいておくれ」

セーラ「はい、モリーさん」

モリー「それから、アメリア先生も、なんだか、そうして貰いたいみたいな事云ってたから、伺っといておくれ」

セーラ「はい、判りました……」

8

同・階段

大あくびで、眼をさますシーザー。

× × ×

朝食の盆を捧げたセーラが、上って来る。

9

同・三階廊下

階段を上って来るセーラ、ミンチンの居室の前に行くと、片手で盆を押え、ノックする——

セーラ「お早うございます…朝食をお持ち致しましたが」

ミンチンのお声「お入り…」

10

同・ミンチンの居室

入って来るセーラ、見て驚く——

まだベッドに半身起したままのナイトキャップのミンチン

ミンチン「ここへお運び！」

セーラ「は、はい…」

セーラ、ミンチンの胸前に盆を運ぶ。チラリとミンチン

と視線が合う。

ミンチン「（気が引け）な、なんです、その眼は…」

セーラ「え？」

ミンチン「（高飛車に出る）フン…生徒のいない時ぐらい、ベッドで朝食をとってなにがいけないんです！」

セーラ「あの…私、別に…」

ミンチン、セーラがとがめた訳でなく、自分の浅ましい早とちりと判ったが、誤魔化す——

ミンチン「ま、よろしい…けれど、こう云う事をしてもよいのは、この私だけです…勿論、アメリアもなりません」

セーラ「え…」

ミンチン「当然です…そうそう、教室の窓ガラスが汚れたままです。磨き上げておくように…」

セーラ「は、はい…」

11 同・三階廊下

ミンチンの部屋を出て来るセーラ、隣りのドアをノックする――

アメリアの声「はあい、どおぞォ！」

12 同・アメリアの部屋

ミンチンと同じように、ベッドに半身起したアメリアが、嬌声で迎える――

アメリア「ンまあ、ありがと…私、一度でいいから、プリンセス様みたいにベッドで朝食……」

ドアから振返った素手のセーラに、絶句。

セーラ「申訳けありません…院長先生が、お食事は、生徒食堂でなさるようにと…」

アメリア「まあ、お姉様が…（撫然）」

13

同・地下の食堂

独りムシャクシャと朝食をとるアメリア。

その脇でシーザーがすり鳴く——

アメリア「シイッ！」

14

同・教室

独り、窓ガラスを磨いているセーラ、ふと窓外に眼をとめる——

セーラ「あ、郵便屋さんだわ…」

急いでドアへ走る——

15

同・表

重い郵袋を担いで、玄関の石段を上って来る郵便配達夫、呼鈴を押す――

咄嗟に、ドアが開いて、セーラが出る。

セーラ「あ、郵便屋さん、お早う」

配達夫「やあ、お早う、メイドさん…郵便だよ」

封筒を一通渡す――（切手は「ブラック・ペニー」）

セーラ「御苦労さま…」

配達夫、戻って行く――

セーラ、封筒を改め、驚喜する。

セーラ「まあ、ペッキーから、私にだわ」

急いで、とって返す――

16

同・教室

入ってきたセーラ、窓際の席に坐り、封筒から手紙を取り出すと、開く――
下手クソな文字と書体を思わせるトットッとした喋りで、ベッキーの声がかぶる。
ベッキーの声「ハイケイ。セーラオジョーサマ。オゲンキデスカ…ワタシモ、トテモオゲンキデス…」

17

ベッキーの家・土間（夜）

吊りランプの下で――テーブルで、考え、考え、一字づつ手紙を書いているベッキー（活字体の棒書き）。
ベッキーの声「イマ。オジョウサマニ。ナラツタジヲ。オモイダシナガラ。イッセイケンメエ。コノテガミヲカイテイマス…」

18 ミンチン女学院・教室

微笑で手紙を読み続けるセーラ。

ベッキーの声「キノウハ。カアサントイッショニ……」

19 地主の家の一角

ベッキーの声「ジヌシサマノトコロニ。ハタラキニ。イキマシタ…」

——働くベッキーと母親、テディたち。

一方で、馬上の地主が、パイプをくゆらしながら、見おろしている。

ベッキーの声「ジヌシサマノトコロデ。ハタラクノハ。カリテイルオカネヲ。スコシデモ。オカエシスルタメデス…」

20 ミンチン女学院・教室

手紙を読んでいるセーラの顔が曇る――

セーラ「可哀想なベッキー…」

その時、ドアが開き、モリーが入って来る――はっとなるセーラ。

モリー「セーラ！…なにをしてるんだよ。市場へ買出しに行く時間だよ！」

セーラ「は、はい、モリーさん…」

急いで手紙を前掛のポケットに仕舞う。

（WIPE）

21 同・台所（夕方）

セーラから野菜の籠を取上げるジェームス――

ジェームス「さあさあ、モタモタしてねえで夕食の支度だ、支度だ！」

セーラ「は、はい、ジェームスさん…」

（WIPE）

22 一階廊下（夜）

壁の灯火の下で、セーラに決めつけるミンチン——

ミンチン「セーラ、灯りのガス代は只じゃないんですからね。使わない時はさっさと消すんです！（パッと灯りを消す）」

セーラ「は、はい、院長先生……！」

23 同・屋根裏部屋（夜）

手燭を手に入って来るセーラ——ほっと机に坐ると、思い出したように、前掛のポケットから、ベッキーの手紙を出し、読み返しはじめる——

24

ベッキーの家・全景（早朝）

それぞれ籠を抱え、袋を背負い、包みを持ったベッキー、母親、テディ、ママサたちが出発する――

ベッキーの声「ケサハ。カアサンヤ。オトウトヤ。イモウトタチト。アサハヤクオキテ……」

25

石橋のある田舎道

ベッキーの声「ウラノハタケデ。トレタ。ヤサイヲ…」

――行くベッキーや母親、弟妹たち。

26

古い街の通り（ヨーク市シャンブル通り想定）

ベッキーの声「マチヘ。ウリニイキマシタ」

——雑踏を行くベッキーたちの姿。

27 広場の青空市（同右）

一角で、大声をはりあげて、並べた野菜を売っているベッキーと、テディ、マアサ、母親たち——

ベッキー「さあさあ、新鮮な野菜はいかがですかあ……安くておいしいお野菜をどうぞォ！」

傍で、負けずに玉子を手に叫ぶテディ。

テディ「さあ、安いよ安いよ……うらの小川で集めて来たばかりのアヒルの玉子だよォ」

その傍で花束を手に叫ぶマアサ。

マアサ「エエ、つみたてのラベンダーのお花はいかがですかあ……洋服入れの虫よけにもなるラベンダーですよォ」

28 ベッキーの家・土間（夜）

考え考え手紙を書いているベッキー。

ベッキーの声「ホントウヲユウト。ワタシガウチニイルト。ソノブンオキユウリヨウガハイラナク、ショクヒモカカルノデ」

29 同・隣りの寝部屋（夜）

ベッキーの声「カアサンハダマッテイルケドタイヘンナノデス……ダカラ。スコシデモハヤク。ソチラヘカエッテハタラキタイデス……」

ワラの中で眠るテディ、マアサ――丸太ベッドに祖母と赤ン坊。傍で母親が夜なべの内職（籠網みなど）をしている。

30 ミンチン女学院・屋根裏部屋（夜）

ベッキーの声「デハオゲンキデ。ベッキーヨリ。ナツカシイオジョウサマヘ」

セーラのM「気の毒なベッキー…、私、あなたには喜んで迎えてくれる温い家族があると心の中でうらやんでいたのよ」

孤独に手紙を見つめるセーラ——メルたちが見上げる。

（中　C　M　）

31 ミンチン学院・表

夏の陽——

日蔭で眠っていたシーザーが、馬車の音に眼をさまし、大あくびでのびをする。

ふと馬車の停る音に——怪訝そうに、隣家の方へ顔を向ける。

32 同・隣家の玄関

停った作業馬車から降りた老管理人が梯子や掃除道具を持った掃除人夫四、五人を連れて玄関へ来る。
老管理人に促された人夫の一人が、 TO LET の看板を外す。
老管理人、一同に何事か命じて、ドアを開け、中へ——

33 同・ミンチン学院の表

シーザー、怪訝に見て尾を立てる。

34

同・台所

モップで床をこすっているセーラ――
椅子に掛け、テーブルに足をのせて、帽子で風を入れているジェームス――
一方で、椅子に掛け、両足先を金だらいにつけてすずんでいるモリー。

ジェームス「フウッ……馬鹿に暑くなりやがったなあ」
モリー「ほんとだよ……この地下室じゃ、ロクに風も通らないからねえ」
汗を拭いながら仕事を続けるセーラ。
ジェームス「おい、セーラ……ここの掃除が終ったら、市場へ行って院長先生の夕食の材料を仕入れて来るんだぞ」
セーラ「はい、ジェームスさん……」
モリー「それがすんだら、洗濯物のアイロン掛けに、トイレの掃除、

裏庭の草むしり、やらせる事は、まだまだ山ほどあるんだからね」

セーラ「は、はい、モリーさん」

モリー「フフ、あたしたちを恨むんじゃないよ……なにしろ、夏休み中だからって、お前を遊ばしちゃいけない、ベッキーの分まで働かせるんだって、院長先生のお云いつけなんだからねえ」

笑うジェームスと、モリー――

その中で、汗を拭いながらもくもくと働くセーラ――

35 同・使用人階段の下

買物籠を手に出て来るセーラ、立停り、吐息をつく――

自分自身に云い聞かせるように呟く。

セーラ「大丈夫よ、ベッキー…私、まだまだ頑張っているわ……」

セーラ、使用人階段をのぼりはじめる。

36

同・表

昇って来るセーラ。暑い夏の陽ざしを仰ぎ、汗を拭う。

ふと物音や人声に、ふっと隣家の方を見る――

×　×　×

隣家の建物の前に、辻馬車が停っており、数人の職人たちが、入口を出入りし、鉄柵を塗り直し、梯子で壁の掃除をしているのが見える。

×　×　×

セーラ「まあ…お隣りに、誰方か引越して来るんだわ」

37

同・隣家の表

鉄柵の脇に、外し置かれた板看板――

TO LET の文字が読める。

開いたままの玄関ドアから、白ヒゲの老管理人と、山高帽にステッキの若い紳士、弁護士のカーマイケルが出て来る。

カーマイケル「では、管理人さん、これで、この邸をお借りする手続きは、全部終った訳だね」

老管理人「その通りですじゃ、カーマイケル弁護士……ご覧の通り、掃除も間もなく終りますじゃで、いつでも引越して来られて結構ですわい」

カーマイケル「では、早速荷物を運び込ませて頂こう……借り主のカリスフォード氏がこちらに見えるのは、そのあとになると思うがね」

老管理人「お待ち申しておりますわい」

カーマイケル「じゃ、よろしく頼むよ」

カーマイケル、停っていた馬車に乗り込む――

――走り出す馬車。

丁重に見送る老管理人や、手を休めた職人たち——

× × ×

一方で、茫然と見守るセーラ——

セーラ「まあ…弁護士さんに、先にお邸を見に来させているなんて…
きっと相当なお金持ちが引越して来るんだわ」

× × ×

見上げる隣家の全景——並んだミンチン学院より大きさ
も装飾も、たたずまいも一段と豪華に見える。

× × ×

セーラ「確か、クリスフォードさんとか仰言ゃったわ……一体、どん
な方なのかしら……お子さんの沢山いらっしゃる、明るい、
にぎやかな御一家だと嬉しいけれど……」

セーラ、そっと歩き出す——

38

コベント・ガーデン市場の通り

撒水馬車が通って行く――

39 同・馬の水呑場

野菜の籠を持ったピーターとセーラが来る――

ピーター「へえぇ、あのミンチン学院の隣りに、そんな人が引越して来るんですか」

セーラ「そうなのよ…まだどんな家族だか判らないけど、もし元気のいいお子さんがいたら、きっと屋根裏部屋まで探険に上って来るわ…そしたら、こちらから声をかけて、お友達になれるかも知れないわ。勿論、ベッキーにも紹介して、みんな仲良しになるのよ」

ピーター「なあるほど…そいつは面白くなりそうだなあ…ようし、俺も、どんな人が越して来るのか拝見しようっと…」

40

ミンチン女学院・表

野菜籠を抱えたピーターと、セーラが来る――二人、はっと気がつく。

ピーター「あれ？」

セーラ「まあ…どうしたのかしら」

× × ×

隣家の前に、大型の荷馬車が停り、野次馬たちが集っている――

× × ×

ピーター「行ってみましょう」

セーラ「ええ……」

41

隣家の表

駆けて来るピーターとセーラ、野次馬たちを分けてのぞく――

×　　×　　×

玄関先に敷かれた大きなインド模様のジュータン――その上に、荷馬車から、次々に、家具調度が運びおろされている。

その中に、小牛程もある石象――金色に輝く一面多臂の踊るシヴァ神像――極彩色の壁掛――チーク材の円卓や椅子――彫刻の衝立――その他、エキゾチックな豪華なインド美術品が骨とう市の如く置かれている。

×　　×　　×

ピーター「凄ッげぇ！……こりゃ、ポートペロの骨とう市より、ずっと立派ですよ」

セーラ「(茫然) インドだわ……」

ピーター「え、インド……?」

セーラ「ええ…みんなインドの美術品や工芸品ばかりよ。インドにいた時、お父様のお部屋にも似たような品がいくつかあったわ」
ピーター「へぇぇ…すると、引越して来るのは……」
セーラ「きっと、長い間インドに住んだ事がある方よ」
職人たちが、次々にそれらの品物を玄関内に運び込み──
積荷をおろし終った荷馬車が、品物を残して走り去る。
見送ったセーラ、はっと気づく──
セーラ「あ、有難う、ピーター……とにかくなにか判ったら、お知らせするわ」
野菜籠を引取ると、ミンチン学院へ──
ピーター「お、お嬢さん……！」
立尽して見送るピーター──

42	ミンチン女学院・台所

入って来るセーラ――

一方で、モリーとジェームスが、アメリアを相手に夢中で喋っている。

× × ×

モリー「そうなんですよ、アメリア先生……先刻、裏庭で隣り家政婦から聞き出したんですけど、今度隣りに越して来るのは……（急に声を潜め）インドの、大金持ちの紳士なんだそうでございますよ」

アメリア「まあ、インド人がお隣りに……」

モリー「尤も、話だと、御主人ってのが、大変な変り者らしくて、家政婦を傭う時も弁護士任せ、まだ顔も見せないそうで、ほんとの所、どの位顔が黒いか、知らないそうでございますけど……」

アメリア「（恐怖）く、黒い顔……」

ジェームス「兎に角、あんな気味の悪い偶像を持っる所を見ると、我

我みたいなキリスト教徒じゃない事は確かでさ…きっと
あの偶然をおがむナントカ教って奴ですぜ」

アメリア「まあ、なんて怖ろしい……」

一方のセーラ、思わず口走る——

セーラ「ち、違います……」

モリー、ジェームス、アメリア、一斉にセーラに気づく。

アメリア「まあ、セーラさん……」

ジェームス「こいつ、いつの間に帰ってやがったんだ」

モリー「ほんとだよ。一体なにが違うってんだよ」

セーラ、決心して口を切る——

セーラ「私…その方が、偶像をおがむとは思いません」

怪訝に顔を見合せるジェームスたち。

ジェームス「なんだって？」

セーラ、ためらったが続ける——

セーラ「だって……私のお父様も、同じような神像をお部屋に飾って

いましたけど、それをおがむ訳ではありませんでした。立派な美術品として大切にしていただけです。きっとお隣りに来る方も同じだと思います」

セーラ、買物籠をテーブルに置くと、パッと出て行く――

アメリア「セ、セーラさん……！」

啞然と顔を見合せるモリーとジェームス。

43 同・屋根裏部屋

駆け込んで来るセーラ、荒い息でドアにもたれる。

セーラ「残念だわ……折角お隣りに引越して来た人がいるのに、もっと親切に迎えてあげるべきだわ……」

ふと、顔をあげ、天窓を見上げる――急いでテーブルにのぼり、天窓から覗いてみる。

44

同・屋根の上

天窓から覗いているセーラ——
——相変らず閉ったままの隣りの天窓。
セーラ、がっかりする。

セーラ「矢っ張り、お隣りには、元気のいいお子さんなんて、いない家なのかも知れないわ……」

45

同・屋根裏部屋

降りて来るセーラ——
その時、激しくドアが叩かれる。

モリーの声「セーラ！…セーラ！」

セーラ「あ、はい……！」
急いでドアに行き、開ける——

立っているモリー。

モリー「なにをしているんだよ！　院長先生がお呼びだよ、早く来ておくれ」

セーラ「は、はい……」

46

同・院長室

デスクから立上ったミンチンが、ジロリとセーラを見下す──

ミンチン「隣りに、妙な人物が越して来た事を知っていますね」

セーラ「はい…でも、妙な方かどうかは……」

ミンチン「妙な人物に決っています……引越しのゴミなどを、こちらの塀に投げ込まれないよう、注意しておきなさい」

セーラ「は、はい……」

47 同・使用人階段の下

出て来るセーラ、堀を見渡す——別にゴミ類はない。

48 同・表

使用人階段を上って来るセーラ、馬車の音に、はっと見る——

×　×　×

走って来た豪華な四輪馬車が、隣りの玄関前に停り、扉が開くと、真っ先に大きなアフガンハウンドがフワリと降り、待つ——続いてカーマイケル弁護士が降り立つのが見える。

49 同・隣家の前

表玄関が開き、使用人らしいターバンの二人の老人が現われると、巻いたジュータンを一気に馬車の降り口まで転がし伸ばす――

カーマイケルが、玄関に向って、両手を叩き、呼ぶ――

カーマイケル「ラム・ダス！……ラム・ダス……！」

玄関口に、若く精悍な顔の、純白のターバン、美しい織布ベルトのインド人、ラム・ダスが現われる――白い歯を見せ微笑すると軽やかにジュータンの通路を馬車に近づく。一礼するとゆっくりと上半身を開いた馬車の中に屈ませる。

やがて、満身の力で捧げ出したのは、毛布に足許を包んだ人物、カリスフォード氏を乗せたままの車椅子――

ラム・ダス、その車椅子ごと、ゆっくりと、カリスフォード氏を捧げ、ジュータンの通路を玄関へ運んで消える。

続くアフガン犬とカーマイケル弁護士――使用人二人が

急いでジュータンを捲き戻して中に消える。

×　×　×

茫然と見守って立尽すセーラ――

セーラのN「お隣りに越して来たカリスフォードさんは、なんと重い病気のように見えたのでした……」

（おわり）